

基礎教養科目「英語 S1」の導入授業 ー複言語主義に基づく「気づき」を契機としてー

木 戸 美 幸

I. はじめに

1. 英語教育改革の背景と現状

経済のグローバル化が進む今日、世界人口の3割強が、母語話者、公用語話者、国際補助言語使用者のいずれかとして英語を使用している。こうした状況をふまえ、英語を使えないデメリットを主に経済界から指摘されてきた結果、日本では英語教育改革が急ピッチで進められつつある。

小学校5、6年生対象の外国語活動は、2011年度からすでに週1コマ実施されてきたが、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した直後の2013年12月13日に、文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。そこに盛り込まれた小学校英語教育の教科化・早期化は、2016年8月1日には文部科学相の諮問機関「中央教育審議会」によってまとめられ、2017年2月14日にはその答申を受けて文部科学省が学習指導要領の改定案を公表、2020年度からの実施をすでに決定済みである。このように、一連の英語教育改革の中でも、とりわけ小学校英語に関しては、指導者の育成をはじめ、教材論、方法論、評価論など、多くの根本的な問題が先送りされたまま、出発点に立たざるをえない様相である。

本稿は、現在求められている英語教育改革の問題点を文献研究によって提示し、次に、本学部で実施した授業での試みについて述べ、授業アンケート結果もふまえながら、効果的英語教育についての考察を行うことを目的とする。

2. 効果的英語教育に向けての本学部の取り組み

京都光華女子大学にこども教育学部が新設されたのは、2015年4月である。文部科学省によって2017年7月26日に公表された省令改正案によれば、小学校

教員の免許取得を目指す教職課程では、2019年度以降、外国語科目（言語系「英語」、教育系「英語科指導法」）の履修を義務づけている。このため本学部は、第一期生の卒業直後から、改正対応版新カリキュラムを新入学生対象に用意することとなる。

将来の小学校英語を担う人材育成は、上述のとおり急務である。その教育に関わる担当者のひとりとして、ここでは、本学部1年生対象に実施した、基礎教養必修科目「英語 S1」の導入授業を振り返ることとする。これによって、現在の英語教育改革が求めていることと、この授業で試みたこととの相違を明らかにしつつ、日本語母語話者が、第二言語としての「英語使用者」になるための、より効果的な学習教材・指導方法を考える一助としたい。

II. 文部科学省指導による英語教育改革の方針と その問題点

1. 目標言語の単一言語化（monolingualism）

2008年3月28日改訂小学校学習指導要領では、5、6年生の外国語活動は、音声を中心とした外国語に慣れ親しませる活動を通じて、①言語や文化について体験的に理解を深めること、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること、③コミュニケーション能力の素地を養うこと、以上3つを目標として掲げていた。これをふまえ、2011年度に小学校で「外国語」活動が開始された。

小学校における外国語活動新設は、教科である中学校英語と異なり、小学校段階では音声中心・体験中心の活動が望ましい、との答申に応えた形で始まっている。さらに、この「外国語」活動に体系性は求められていない。したがって、英語文化圏に限らない近隣在住の外国人や、異文化体験の豊富な人材との、さまざまな交流を通して、児童が複眼的に人間、社会、文化

を捉え、「グローバルな」視野を育む機会とすることも可能であった。

ところが小学校英語の教科化・早期化を盛り込んだ「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が出された時点で、対象言語が「英語」に限定されたことは注視すべきである。今日、英語がグローバル時代の国際共通語であることは認めるにしても、同時に、世界は多言語であるとの認識が欠かせないし、世界的に見ても、EUのように、言語教育政策では、多言語・多文化的視点に基づく複言語主義（*plurilingualism*）を重視しているのと対照的である。

複言語主義とは、母語を含め、学んだ言語に関連づけながら、新たなコミュニケーション能力を創出することであり、他者の言語、異質な文化を学ぶことによる全人的な発達を目的としている（鳥飼他 2017）。

たとえば、その教育が世界的に注目されているフィンランドでは、小学生が母語に加え、英語だけでなく、隣接する国々の言語を選択学習し、言語文化の多様性を学び、他国やその文化を尊重する態度を育んでいる（伊東 2014）。日本でも、東京都が 2022 年度に立川市で開校予定の都立小中高一貫校では、小学 1 年からの英語と、中学からの第二外国語必修科目化、といった独自の教育課程を計画している¹⁾。これらは、複言語主義に基づく外国語教育の一例といえよう。

日本の公教育で、「英語」を小学校の段階から教科化することの是非、意義、効果などに関して、専門家を交え、時間をかけて議論されることもなく決定された点については、大津、江利川、斎藤、鳥飼など、多くの専門家が危惧し、反対表明している。寺沢、仲、藤原は、2011 年度開始の「外国語活動」教育の結果検証をすることもなく、小学校英語が教科化・早期化される点を問題視する。さらに、イギリスが EU 離脱を決定し、アメリカが自由貿易を敵視して「アメリカ第一主義」を唱える大統領を選んだように、昨今の世界情勢は、むしろ「脱グローバル化」に向かっていると指摘し、このような時代に、「グローバル化」の名の下、日本において英語一極化が進むことへの強い懸念を示す。

2. モノリンガルの教授法：「英語は英語で教える」

寺沢によれば、英語（正確には「外国語」）が中学校で必修教科になったのは、意外にも 2002 年のこと

にすぎない（寺沢 2014）。歴史的にみれば、明治になって 1873 年、西洋の近代的な学問の吸収に努めようと英語による授業が開成学校で開始されたものの、約 10 年後、国粋主義の台頭で、英語を日本語で教える方針に変更され、以降、文法を中心に日本語による対訳で英語を学ぶ「変則式教授法」が続けられてきた（斎藤 2007）。

しかし、2009 年度の高校学習指導要領に盛り込まれ、2013 年 4 月から実施されている英語の「授業は英語で行うことを基本とする」方針、さらに安倍首相の私的諮問機関「教育再生実行会議」での検討を経て、2014 年 6 月に閣議決定された「中学校における英語による英語授業の実施」が示しているように、今や、中学校・高校での「外国語」の授業には、「英語」を「英語」で教えることが求められている。

しかも鳥飼によれば、高校の「英語で授業」には実はダブルスタンダードが見られ、むしろ進学校では実施されていない、という²⁾。JACET 名誉会長小池も、2017 年 8 月 31 日の JACET 56th International Convention での招待講演³⁾において、「英語で授業」の実施率は、文部科学省の発表によると、中学校で 60%、高校で 45%であるものの、実態はどちらも 20～30%である、との数字を挙げている。

「英語で授業」方針の実施開始年に高校 2 年生であった本学部現 3 年生はもとより、高校 3 年間を通して「英語で授業」を受けてきたはずの本学部現 2 年生・1 年生対象の聞き取り調査でも、（時折、英語ネイティブスピーカーの ALT が授業を担当した場合を除いて）「英語の授業を英語で受けてきた」学生は皆無、との回答を得ている。この結果は、鳥飼ならびに小池の指摘により近く、むしろ両者の挙げた数字が「英語で授業」の実態を表していると考えられる。

たとえばスペイン語を母語とするメキシコ人が、アメリカで職を得るために一家で移住し、日々生活しながら英語を第二言語として覚える、といったケースであれば、母語を使用しない（できない）ことは、第二言語習得に効果的、効率的であろう。

しかし、日本語母語話者にとって、言語的にもっとも言語間の距離が大きく、また、日常生活のレベルで必要不可欠でもないゆえに学ぶ動機が高くない英語を、授業中に使用言語を「英語」に限定して教えても、学習効果をあげるとは思えない。

上述のメキシコ人一家の例のように、目標言語にふれる時間の長さは、インプットの量に関係し、言語習得にとってたいせつな要因となる。では、日本の中学の義務教育では、いったいどれほどの時間が英語教育に充てられているのであろうか。

中学生は、週4回で4時間（実質は50分授業を週に4回で200分＝3.3時間）の英語の授業を、3年間受けることになっている。文部科学省は1年間の授業実施数を35週としているので、1年間合計140時間が英語の授業時間数となる。140時間、といえば、計算上ではたったの6日間である。1日24時間のうち、活動時間を8時間として計算すれば、140時間の勉強時間は17.5日分、3週間弱（2週間強!）の勉強時間、とも言い換えることができる。

つまり、数字の上では、中学3年間の義務教育で総計52.5日分の英語の授業を受けるにすぎない。3年間の学習、というより、2ヶ月弱の学習では、たとえ「英語で授業」を行っても、英語習得という結果にはつながりにくい。むしろ、これほどの短時間授業で、体系的に積み上げられた文法事項を理解し、文章を読み、語彙を覚えることを、母語を使わない「英語」のみによる指導で期待するのは、ほとんど非現実的ではないだろうか。

Ⅲ. 複言語主義的アプローチに基づく 英語原書と日本語訳書の絵本比較

1. 受講生の背景と授業の目的

こども教育学部に所属して3年間、基礎教養必修科目「英語」（1年生対象）の担当者として、毎年、初回授業から対応を迫られるのが、大多数の受講生が抱く英語への苦手意識である。

大学が開講する科目のうち、「英語」は、高校での教科と名称が一致する数少ない科目であるため、大学入学以前の「英語」学習体験が、入学後に履修する「英語」にも負の影響力を及ぼしているのが一因であろう。

「中学・高校と6年間勉強したけれど、英語は全然わからない。」という多くの受講生が明かすのは、過去の定期試験を乗り越えた「日本語訳丸暗記作戦」である。教科書の内容に関して、日本語対照訳を暗記し、試験に出された英文に相当する（と思われる）日本語訳を書く、というやり方である。この日本語訳も、自

分で文法を分析し、語彙を調べて練ったものではなく、授業中に教員が訳したものの書写にすぎない。学生がこれを英語学習と考えるのであれば、なるほど英語習得は望むべくもなく、英語に興味関心をもつことすら期待できない。

しかも英語教育改革過渡期の渦中で、この学生たちの一部は、卒業後、「自分が学んだ英語の授業」とは異なる指導法で、「自分が学んだこともない必修教科小学校英語」を、学年ごとで発達段階の差が大きな年齢期の小学生に教えるという、前例なき世代となる。そこで、ロールモデルを持たない不安を解消するために、「こんなふうに英語を学ぶと楽しくてわかりやすい!」を目標に、実践授業を展開することにした。初回授業で用いたのは絵本である。

学習者が言語表現に意識的な注意を向けることを「気づき」と呼ぶ。限られた数の易しい語彙で書かれ、意味理解に役立つイラストが添えられた絵本は、なにより、目標言語への「気づき」が容易である。したがって、母語との比較を促しながら、小学生に英語を教え、また異文化に親しんでもらう最良の教材となる。学生が自らそれを体験することで、小学校英語の方法論、教材論などについて考える一助となることを目的として実践した授業の詳細は、以下のとおりである。

2. 複言語主義に基づく授業

同じ絵本について、英語原書と日本語訳書の読み比べをすることは、目標言語「英語」を、母語である「日本語」と比較し、両言語の相違を意識化させる最良の方法である。これは、母語の適度な活用が、外国語学習に効果的であるとの、複言語主義的知見に基づいており、現在、世界の外国語教育で支持されている方法論にも通じる。

教材論から考えても、意味のあるものを読むことの重要性は大きい。本学部は、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、保育教諭の資格を目指す学生が学ぶ学部であるので、卒業後の職場では、絵本の多用が想定される。このため、基礎教養必修科目「英語」の導入授業でも、絵本を使つての授業を試みることにした。

絵本には、英語母語話者のこども対象に絵本作家によって書かれた絵本と、第二言語を習得するこどもを対象に音韻、意味、統語を制限して、段階的に書かれた教育用絵本がある。両者とも、限られた時間内で読

みきることが可能で、かつ、ストーリーが完結している点では、外国語教育の授業での使用に耐えうるが、こどもの知性や情緒に訴える点と、絵本作家がそのすばらしい感性で描きあげたイラストが多くを語る点において、前者は後者とは比較にならない魅力をもつ。

英語母語話者のこども向けに書かれた絵本には、以下のような特徴がある。

- ① こどもの生活に密着した題材を、こどもの目線で語る内容
- ② 記憶に残るリズムカルな単語、句、節、文の繰り返し表現
- ③ イラストに集中させつつ、耳にした音と表記された文字との関係、単語のつながりなどが、ことばへの豊富な「気づき」を誘発

どの文化においても、優れた絵本とは、こどもの言語習得に寄与し、かつ、こどもの心を豊かにする力を持っている。外国語言語材料にも、単に言語習得だけを目的とするのではなく、「意味のあるもの」を求めたい。この点において、上述の特徴を兼ね備えた絵本は、こどもに外国語を教える際の有用な教材である。

3. 実施授業の詳細

【対象科目と実施時期】

こども教育学部こども教育学科全1年生対象

基礎教養必修科目「英語 S1」

前期初回授業（2017年4月）

【使用教材】

英語原書 *Library Lion*

日本語訳書『としょかんライオン』

（光村図書出版『国語 三 下 あおぞら』

この本、読もう一本は友だち p119で紹介）

【方法】

- ・『としょかんライオン』全編を受講生代表がクラス全体に「読み聞かせ」する
- ・Active Learningを活用し、2～3名のグループになって、知らない受講生と知識を共有し、コミュニケーションをとりながら、作品冒頭部分の日本語訳を英語にする。英和/和英辞書使用可
- ・30分後、英語原書の相当部分を渡し、自分たちの英語訳と比較しながら、日本語と英語の違いに関する「気づき」を、各グループで用紙に記載する

【目的】

- ・日本語と英語の相違点への「気づき」

【参考資料】

授業で課題とした作品冒頭部分

（日本語訳書）

あるひ、としょかに ライオンが はいってきました。

かしだしカウンターのよこをとおり、ずんずんあるいていきます。

「で、そのライオンは としょかのきまりを まもらないんですか？」と、メリーウェザーさんはききました。

きまりについては、なかなかうるさいのです。

（英語原書）

One day, a lion came to the library.

He walked right past the circulation desk and up into the stacks.

"Is he breaking any rules?" asked Miss Merriweather.

She was very particular about rule breaking.

4. 「気づき」のまとめ

【受講生の「気づき」例】

語彙

- ・和英辞書に記載された語彙は、文意を理解した上で選ばなければならない

例 「あるひ」(some day は不適切)

「まもる」(protect は不適切)

「ききました」(heard は不適切)

「きまり」(regulations/rules/law 最適なのは?)

「うるさい」(noisy は不適切)

「うるさい」(demanding/strict/particular 最適なのは?)

「なかなか」(「ずいぶん」「とても」の意味)

- ・無生物の所有格の表現方法

「としょかのきまり」

=library's rule/the rule of library ?

- ・冠詞

「としょかのきまり」に the は要/不要?

- ・単語を分割して、和英辞書を引く

例 「かしだし」「カウンター」

checkout と counter を見つける→

=checkout counter

「貸し出し」=loaned money を見つける→

money を counter に置き換える

=loaned counter

- ・擬態語「ずんずん」を表す適切な英語がない
- ・「ずんずん」を文脈から「どンドン」などと想像して、英語にしなければならない

統語

- ・日本語と英語は語順が違う
- ・主語のない日本語文を英訳すると、主語が必要
- ・同じ主語を続ける場合、二度目からは代名詞
- ・イラストから、ライオンの「たてがみ」に気づき、代名詞は he に決定
- ・名詞には冠詞が必要だが、状況にふさわしい冠詞の判断ができない
- ・動詞の時制に注意が必要
- ・「もらえないんですか」を付加疑問文で表現？
=And, this lion obeys library rule, doesn't it?

異文化

- ・「メリーウェザーさん」の綴りの推測
ストーリー全体から、図書館長の性格を考え、
Merry Christmas! の音韻との類似性に気づき、
「陽気なお天気さん」を推測

【教員が示した「気づき」】

語彙

- ・和英辞書に記載された語彙は、必ずしも正確ではない。和英辞書で調べた場合は、必ず、英和辞書でその使用例があるのかを、再確認する必要がある。

例 和英辞書掲載の「かしだしカウンター」=lending counter は正確な単語ではない

「かしだしカウンター」

=the circulation desk

→その理由を考えてもらうため、circulate の意味を調べさせる

=「借りる」「返す」行為が繰り返され、本が「循環する」のが図書館である

- ・作品の訳者が、原書を逐語訳するのではなく、日本語としてわかりやすいよう意識している

例 英語原書の stacks（書架）が日本語訳書では訳出されていない

right past the circulation desk and up into the stacks

= 擬態語「ずんずん」で表現

→図書館にライオンがやって来て、周囲が驚愕しているのをよそに、ごくふつうの図書館利用者のようにそのライオンが書架に行く様子を、擬態語で効果的に表現

- ・日本語訳書では、作品最後までライオンを代名詞で表現することはない。したがって、ライオンの性別はまったく意識化されない

表記

- ・日本語では通例「分かち書き」をしないが、この作品では一部している。また、通常の読点「、」も併用している。

→読者層への配慮

統語

- ・日本語の動詞には、過去形と非過去形しかないが⁴⁾、英語では時制の一致が必要

例 「あるいていきます」

=walked

→ストーリーが過去なので、動詞は過去形となる

- ・英語原書の「普通疑問文」が日本語訳書では「否定疑問文」で表現されている

例 「(図書館の決まりを) もらえないんですか」

=Is he breaking any rules?

=「(図書館の決まりを) やぶっているんですか」

→まもる (follow) を使って婉曲的に「もらえない」とせず、やぶる (break) を使って直接的に問うところに、英語文化と日本語文化の相違を指摘

- ・日本語のあいまいさ

だれがきまりの何についてうるさいのかがあいまい

例 「きまりについては、なかなかうるさいです。」

=She was very particular about rule breaking.

【2 言語の相違点の意識化】

日本語訳書→自分たちの英語訳→英語原書との比較によって受講生が学んだのは、主に以下の点である。

- ・各グループの疑問点や誤りが多い場合共通しているのは、母語（日本語）のマイナス転移に起因するからであり、この母語干渉を自覚することは、英語運用能力を高めるのに有効である。
- ・英語で書かれた絵本の原書が描くできごと、人物、会話の内容に、日本の社会、文化とは異なる点が見られる。つまり、言語の違いには、異なる価値観や考え方も反映されている。

Ⅳ. 新しい文法指導の試み

近年、「コミュニケーション英語」の重要性が強調される一方で、明治以降の「変則式教授法」が否定される傾向にあるが、言語習得の中心は、母語であれ、第二言語であれ、語彙の知識と文法規則の習得である点を忘れてはならない。

だがこれまでのように、体系化された文法項目を大半の文法書が記載する順に教え、その文法事項を含む文章を和訳で対訳する方法が、日本語母語話者にとって英語を習得する最適な方法論とも思えない。

そこで1年生対象基礎教養必修科目「英語 S1」の導入授業では、絵本の英語原書と日本語訳書の比較をする初回授業に続き、日本語と英語の統語上、顕著に異なる5点に絞り、その相違点が意識化されるような文法授業（90分授業×5回）を行った。

文法は、受講生がもっとも苦手意識を感じる点であることを考慮し、絵本の比較を試みた初回授業によって、受講生の意識に顕在化した日本語と英語の相違点に常に注意を促しながら授業を進めた。「英語がわからないのは自分のせいではなく、日本語母語話者であれば、英語のここがわからない、または、ここを間違える、のはあたりまえだ」と納得させるためである。

母語干渉に起因するため、再現性があり、規則的に生じるこの間違いを、第二言語分野では、mistake とは区別し、error（誤用）と呼ぶ。誤用分析こそ、教え方の戦略上、もっとも重要な知見となる。

以下、導入授業で扱った、日本語と英語の統語上の違い5点について述べる。

1. 【主語】

英語の基本5文型を示し、S（主語）とV（動詞）は、そのすべての構文に必要であることを確認する。他方、

日本語は主語の脱落が許される言語であることを、日常会話を再現することで意識化させる。

英語における代名詞の存在は、主語が不可欠である文構造で説明できる。日本語であれば主語の表示がなくても許容されるものの、英語では同じ主語の繰り返しを避け、かつ、主語を明示するために代名詞が多用される。

他方、日本語では本来、第三人称は使わないのが一般的であり、一例として最近「彼」が多用されるのは、「英語の勉強で he を『彼』と訳すことを学校でしすぎたせい」⁵⁾との日本語教育専門家の観点も加えて説明する。

2. 【SVO 構文と SVC 構文】

英語の SVO 構文は、日本語では（S）OV 構文、

英語の SVC 構文は、日本語では（S）CV 構文となることを意識化させる。

この英語構文理解の決め手は O（目的語）と C（補語）の区別である。同時に、英語において、その区別を決定するのが、他動詞と自動詞の違いであることに気づかせる。

受講生の理解が困難な目的語と補語との違いを意識化させるには、日本語との比較がもっとも有効である。つまり、日本語であっても脈絡なく「見た?」「聞いた?」と問われたら、意味不明で返答ができない。英語の他動詞とは、このように、目的語「なにを」がなければ、意味論的に完結しない動詞であることを理解させる。

次に、中学、高校で辞書の引き方を学んでいない大多数の受講生に、辞書の使い方を教えてから、動詞の調べ方を実践させる。

おなじみの動詞（study, run など）を引き、動詞の項には、他動詞と自動詞の別と、各訳、その使用例が記載されていることを学習させる。英語の動詞の多くは、両方の使い方が可能である（それがまた、動詞理解を困難にする要因ともなっている）が、他動詞として使用する場合、目的語を必ず必要とすることを、動詞の意味を確認しつつ、文例から学ばせる。

3. 【名詞の修飾】

日本語と英語の違いが鮮明な文法事項として、名詞を修飾する句、節の場所を意識化させる。関係代名詞、

関係副詞、分詞の形容詞的用法に言及するのも、この時点である。

この説明に有用なのは、英語国民に時代を越えて伝承されてきた童謡 Mother Goose の一篇 The House That Jack Built と、谷川俊太郎作『これはのみのびこ』との比較である。

The House That Jack Built は、英語の代表的な積み重ね唄（accumulative rhyme）で、先行する詩行を次々ととりいれ、あとになるほど詩節が長くなる仕組みとなっている。『これはのみのびこ』も同様に作られているが、名詞（以下の例の一重下線部）を修飾する節が、関係代名詞（以下の例の二重下線部）に導かれ、名詞の後に続く英語に対し、関係代名詞を必要としない日本語では、名詞の前の修飾がどんどんと長くなっていく。

例 This is the rat,
 {That ate the malt
That lay in the house
That Jack built}.

(The House That Jack Built より抜粋)

これは {のみの びこの
 すんでいる ねこの ごえものの
 しっぽ ふんずけた あきらくんの
 まんが よnder } おかあさん
 (『これはのみのびこ』より抜粋)

Mother Goose では、名詞 rat の修飾節を{後ろ}に置くのと対照的に、谷川作品では、名詞おかあさんの修飾節を{前}に置いている。

この一例が示すように、英語では、関係代名詞が導く節で名詞を修飾する場合、名詞の後ろに置く。ただ、分詞の形容詞的用法を用いて修飾する際、1語であれば、名詞の前に修飾語を置くことが許される。2語以上の場合、関係代名詞節と同様、名詞の後ろに置かなければならない。

例 Look at the {dancing} girl.
 Look at the girl {dancing there}.
 Look at the girl {dancing on the stage}.

4. 【前置詞】

英語の品詞のうち、日本語にはない前置詞について、主にその使い方の注意点に気づかせる。

受講生の大多数は、on、in、at といった前置詞の

後に続く品詞が名詞であることは理解しているので、導入授業では、動詞を使用する場合も、名詞化する点に注目させている。

例 He is afraid of losing the important key.

上記文は、前置詞 of が動詞 is や形容詞 afraid と決まった連語を作る慣用的な例である。lose（失う）は動詞であるが、前置詞 of の後ろでは、動名詞 losing とすることによって名詞化し、前置詞の目的語としての役割を果たしている。

これと上記 3) での説明を比較させると、現在分詞～ing と動名詞～ing は、形が同じであっても、異なる働きをするものであることが意識化されるのである。

5. 【屈折語と膠着語】

統語の構造上、英語と日本語は異なる分類に属している。

例 sTom loves oMary.
 = メリーがトムを愛しているかは不明
sMary loves oTom.
 = トムがメリーを愛しているかは不明

つまり、S と O の位置を入れ換えた上の 2 文は、意味的には異なる英語である。他方、

例 トムはメリーを愛している。
 メリーをトムは愛している。

上記日本語 2 文は、「トム」と「メリー」の文中での位置は逆であっても、「は」「を」の働きのおかげで、同じ意味をもつのである。

助詞、助動詞など付属語によって統語機能が示される「膠着語」の日本語とは異なり、「屈折語」の英語の構文では、語の順序や語形変化が重要な役割を担う。意味の誤解が生じないよう、S、V、O、C といった文を構成する要素を担う語（句、節）に関して、その語順が固定化されている。

したがって、英語受容（listening と reading）時には、S、V、O、C の正確な分析が、産出（speaking と writing）時には、適切な文型選択と語順遵守を徹底的に意識化することが重要となる。

V. おわりに

Ⅲ、Ⅳ章で記した計 6 回にわたる導入授業後、全受

講生 89 名対象にアンケートを実施して、

- 1) 英語原書と日本語訳書を比較して絵本を読むのは、楽しかったか
- 2) 英語原書と日本語訳書を比較して絵本を読むのは、英語習得に役立つと思うか

を尋ねた。その結果によれば、絵本の比較が楽しいと回答した受講生ほど、その比較が英語習得に役立つと考えている（資料参照）。

英語と日本語の相違に基づく意識的学習は、日本語母語話者にとって、言語間の距離が大きな英語に関して、多くの「気づき」もたらす有用な方法であることが、大学 1 年生を対象に実践した上述の授業と、授業後のアンケートによって明らかとなった。他方、この方法が目標言語の習得に効果的に作用するのかについては、今後の持続的研究を待たなければならない。

今回、基礎教養科目「英語 S1」の導入授業で実施したのは、1 冊の絵本を切り口とした、英語原書と日本語訳書の比較であり、その結果として、両言語への「気づき」がたくさんあった。今後は、さまざまな絵本を用いて、この比較を重ねながら、受講生の「気づき」を深め、英語の効果的習得へと結びつけたい。

これらの受講生が将来小学校英語教育を担う場合には、同様の教材論・方法論を実践し、意識的な複言語主義に基づく授業を展開していくことを願う。

英語を学習させるのであれば、母語も発達段階にある小学生にこそ、英語の授業において、日本語を学ぶ「国語」という教科との連携を意識化した言語教育を推奨したい。それによって、両言語への「気づき」が起り、その「気づき」に基づいて、さらに両文化への興味、関心をも深化させることが可能となるはずだからである。

それはまた、多様な言語や異文化を認め、尊重する価値観を育成する第一歩になるはずで、グローバル社会とは、まさにこのような価値観が共有される社会でなければならない。

注

- 1) 日本経済新聞 (2017) 「第二外国語を中学から必修都の小中高一貫校」 (4 月 28 日)
- 2) 鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史 (2017) 英語だけの外国語教育は失敗する 117-118

- 3) 小池生夫 (2017) *English Education in Japan: Past, Present and Future: The Significance of Making JACET Archives*
- 4) 木戸美幸・蓑川恵理子・鈴木 Suzuki (2017) 絵本で楽しく！幼児と小学生のための英語—英語教育と日本語教育の視点—222
- 5) 木戸美幸・蓑川恵理子・鈴木 Suzuki (2017) 絵本で楽しく！幼児と小学生のための英語—英語教育と日本語教育の視点—72

引用文献

- 伊東治巳 (2014) フィンランドの小学校英語教育. 研究社
- 江利川春雄他 (2014) 学校英語教育は何のため？ ひつじ書房
- 大津由紀雄他 (2013) 英語教育、迫り来る破綻. ひつじ書房
- 加藤重広 (2007) ことばの科学. ひつじ書房
- 樺島忠夫他編 (2012) 国語三下あおぞら. 光村図書
- 斎藤兆史 (2007) 日本人と英語. 研究社
- 斎藤兆史他 (2016) 「グローバル人材育成」の英語教育を問う. ひつじ書房
- 谷川俊太郎 (1979) これはのみのびこ. サンリード
- 寺沢拓敬 (2014) 「なんで英語やるの？」の戦後史. 研究社
- 鳥飼玖美子他 (2017) 英語だけの外国語教育は失敗する—複言語主義のすすめ. ひつじ書房
- 藤原康弘他 (2017) これからの英語教育の話をしよう. ひつじ書房
- Knudsen, Michelle. Hawkes, Kevin. (2006). *Library Lion*. Candlewick Press. 福本友美子訳 (2007) としょかんライオン. 岩崎書店
- Wright, Blanche Fisher (Illustrated). (1916). *The Real Mother Goose*. Checkerboard Press.

URL 資料 (2017 年 7 月現在)

- 文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afield-file/2013/12/17/1342458_01_1.pdf
- 文部科学省『小学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/

micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/05/12/
1384661_4_2.pdf

文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』

[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/
micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/06/27/
1387017_13_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/06/27/1387017_13_1.pdf)

文部科学省『中学校学習指導要領』

[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/
micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/06/21/
1384661_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/06/21/1384661_5.pdf)

文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語』

[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/
micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/07/04/
1387018_10_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afield-file/2017/07/04/1387018_10_2.pdf)

文部科学省『高等学校学習指導要領』

[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/
kou/kou.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf)

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語 / 英語』

[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/
youryou/1282000.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm)

資料

絵本の英語原書と日本語訳書の比較が楽しかったか、と絵本の英語原書と日本語訳書の比較が英語習得に役立つと思うか、との関係を以下に示す。

